

# 稲垣 佑典 データ科学研究系/社会データ構造化センター

## 世界の幸福/Well-Bing調査

◆ 国連調べでは、日本の幸福度ランクは156カ国中**54位**と**先進国の中でかなり低位**  
 e.g. **1位フィンランド**、**2位ノルウェー**、**3位デンマーク**、**156位カメルーン**、**155位中央アフリカ**、**154位南スーダン**  
 今回比較する**韓国は57位** (World Happiness Report 2018)

◆ OECD指標でも、ほとんどの指標が加盟国の平均以上にもかかわらず、全体では**中位グループ**に属する (OECD Better Life Index 2017)

## 調査概要とWell-Bing項目の比較結果

◆ 専修大学社会知性開発研究センターによる『ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査(SWB調査)』  
 ⇒ **SWB = Social Well-Being (≠ Subjective Well-Being)**  
 ⇒ 個人のみならず社会関係を視野に入れたWell-Beingの概念

◆ 東アジア7か国で調査を実施  
 ⇒ 2015年: 日本・韓国・ベトナム、2016年: フィリピン・タイ、2017年: インドネシア・台湾で調査実施  
 (日・韓・台はWeb調査、それ以外は訪問面接調査)

本研究は平成26~30年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業S1491003の助成を受けたものです。「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」は、アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの協力を得て、専修大学社会知性開発研究センター/ソーシャル・ウェルビーイング研究センター(研究代表: 原田博夫経済学部教授)が設計・実施したものです。

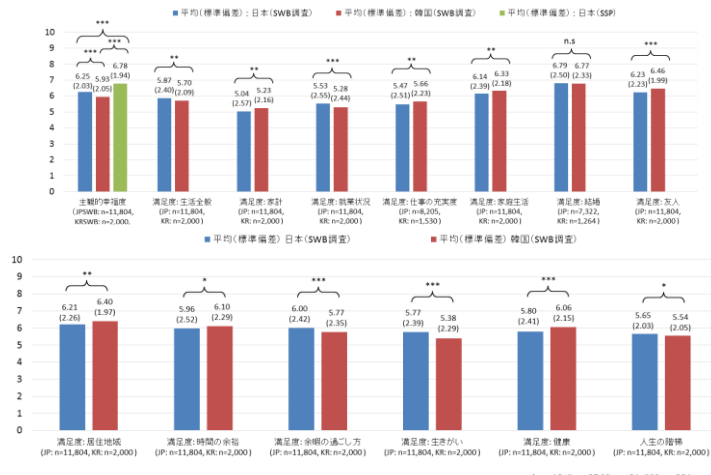


図1. 各Well-Bing項目の日韓比較結果

## 潜在クラス分析による幸福観の日韓比較

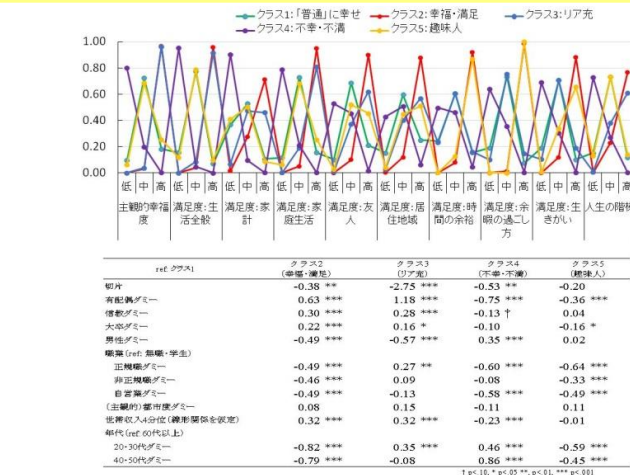


図2.1. Well-Bing項目の潜在クラス分析結果(日本)

- ◆ 客観指標と幸福度との関係は非線形性が高く、関連薄い(例 DGP: 関連低、健康: 関連高)ことが多い (田辺・鈴木 2014)
- ◆ Well-Beingの比較は文化圏という広い観点からのものが多い (e.g. Ronald Inglehart & Welzel 2005)

しかし...

- ◆ 同じ文化圏でも価値観には違いがあり、回答の意味合いは異なる(鄭 2005; Shin 2012)
- ⇒【今回の目的】同じ文化圏の「幸福観(≠幸福度)」の差異を検討

◆ 日本調査(JPSWB)  
 ⇒ 2015年2月に調査登録パネルを対象に計画サンプルサイズ10,000で実施  
 ⇒ 2010年国勢調査のデータをもとに性別・年代・都市規模・地域区分で割付  
 ⇒ 有効サンプルサイズ: 11,804

◆ 韓国調査(KRSWB)  
 ⇒ 2015年11月に調査登録パネルを対象に計画サンプルサイズ2,000で実施、  
 ⇒ 2010 Korean Population and Housing Census (KPHC)をもとに性別・年代・地域区分で割付  
 ⇒ 有効サンプルサイズ2,000

※参考として2015SSP調査(2015年1月実施) 主観的幸福度項目との比較も実施

表1. Bayes推定による差の比較結果

比較群	平均	95% HDI		
		Lower 2.5%	Upper 2.5%	
主観的幸福度	JPSWB vs KRSWB	0.31	0.21	0.42
	KRSWB vs JPSSP	-0.85	-0.96	-0.73
	JPSWB vs JPSSP	-0.53	-0.62	-0.45
満足度: 生活全般		0.17	0.07	0.27
満足度: 家計		-0.19	-0.29	-0.08
満足度: 就業状況		0.25	0.13	0.36
満足度: 仕事の充実度		-0.18	-0.31	-0.06
満足度: 家庭生活		-0.19	-0.30	-0.08
満足度: 結婚		0.05	-0.09	0.19
満足度: 友人	JPSWB vs KRSWB	-0.24	-0.33	-0.14
満足度: 居住地域		-0.18	-0.27	-0.08
満足度: 時間の余裕		-0.14	-0.25	-0.03
満足度: 余暇の過ごし方		0.23	0.12	0.34
満足度: 生きがい		0.40	0.29	0.51
満足度: 健康		-0.26	-0.36	-0.16
人生の階梯		0.11	0.01	0.20

- ◆ 項目レベルでの日韓差は大きくなく、国×年代別の比較をしても、両国で非常に良く似た傾向が観察可能
- ◆ SWB調査とSSP調査の間では比較的大きな差があり、同時期に実施された調査であるにもかかわらず、SSPの方が幸福度高い
- ◆ 年代別の比較でも、SWB: 若年は不幸で年代の上昇とともに幸福度上昇、SSP: 若年と高齢層において幸福度高いという違いが観察
- ⇒ SSPで若年の幸福度高: 若年層の低回収率によるもの
- ⇒ SWBで幸福度低い(特に若年): Web調査特有の自己開示性の高さ & パネル特性 (e.g. 吉野 2015)

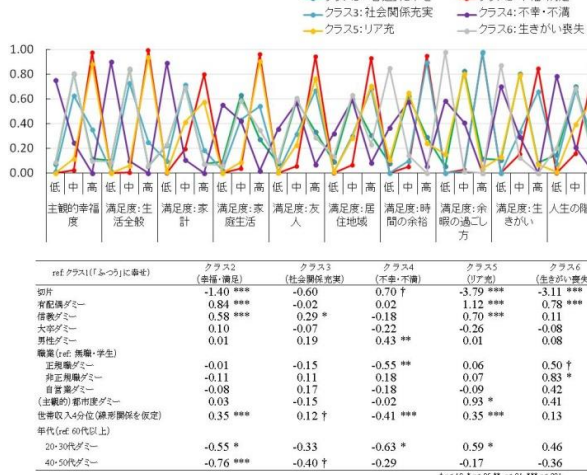


図2.2. Well-Bing項目の潜在クラス分析結果(韓国)

◆ 日韓ともに「**普通に幸せ**」が最も多く、高いWell-Being状態を表しているのは「**幸福・満足**」クラスだけではない可能性がある  
 ⇒ アジア文化圏に特有の中間回答の影響の可能性あり  
 今後、インドネシアやタイのような文化的にやや異なる国の結果をもとにした議論が必要(「文化多様体解析: Cultural Manifold Analysis (CULMAN)」のパラダイム)

◆ 日韓とも「幸福・満足」の若年の効果は負だが、「不幸・不満」における若年の効果が正なのは日本の特徴、一方、「生きがい喪失」クラスは韓国だけの特徴  
 ⇒ 国ごとの特徴は不幸の方に表れるかも(幸福概念に文化差は無い(Diener & Tov 2005) ⇔ 不幸には文化差あり) 実践面では**幸福の向上より不幸の減少の方が大切であり、不幸概念の解明もWell-Being研究に必要なことを示唆**